

# 小杉美穂子+安藤泰彦 展

今日の表現 1

1990.3.5(Mon) — 3.27(Thu)

■3月7日・14日は休所

主催=京都市 協力=三菱電機株式会社・株式会社 七彩

## Kosugi+Ando: Works

小杉 美穂子

Mihoko Kosugi

1953年生まれ

安藤 泰彦

Yasuhiko Ando

1953年生まれ

連絡先 長岡京市今里二丁目8-3

TEL/FAX(075)952-4870



- 1983 3. Rec.(Recording) No2 「CODAN」(Book)
- 9. Rec.No3 「Recording No3」  
Kiyamachi Gallery 6×6m
- 1984 3. Rec.No4 「The Quarter-Final」  
京都アンデパンダン展 8×16m
- 1985 3. Rec.No5 「通路 Passage」  
1. 「痕跡 trace」 京都アンデパンダン展 8×16m  
2. 「部屋 room」 Gallery Suzuki 5×5m  
3. 「通路 passage」 galerie 16 6×11m
- 1986 3. Rec. No6 「アクタイオーンの夢 the dream of Actaeon」  
京都アンデパンダン展 8×16m
- 7. Rec.'No1 「Veil」(Book)
- 7. Rec. No7 「ヴェール」という名の本 the book named  
Veil」 galerie 16 6×11m
- 1987 3. Rec. No8 「芳一・物語りと研究 Hoichi; story and  
study」 京都アンデパンダン展 8×16m
- 9. Rec. No9 「婚礼 Wedding」 galerie 16 6×11m
- 1988 9. Rec. No10 「Catalog 1988」(Book)
- 9. Rec. No11 「とはざがたり」 galerie 16 6×11m
- 1989 3. Rec. No12 「Play-Room 遊戯室」  
京都アンデパンダン展 8×16m
- 7. Rec. No13 「Nine Rooms 九つの部屋」  
大阪・ABCギャラリー 24×14m
- 1990 1. Rec. No14 「FLASHBACK～回顧する現在～」  
福岡・三菱地所アルティアム 6×20m

## 開催にあたって

京都市四条ギャラリーは、京都市における多様な芸術活動の振興を図り、市民の文化の向上及び発展に資するため、芸術作品の展示、公開をはかることを目的として設けられたものです。その際、すでに制作され、評価を受けた美術品のほかに、現にいま京都を中心活動中の作家の仕事を紹介する場としても積極的に活用する目的をもっています。

このたび「今日の表現1」として小杉美穂子、安藤泰彦による新しい表現(FLASHBACK II)を紹介するのはこの1回目の企画にあたるもので、岡氏による表現は1983年に始まり、京都アンデパンダン展や街の画廊を中心にこれまで14回も展覧活動を重ねてきましたが、その特徴は第一の表現が第二の表現の起因となり、第二の表現がまた第三の表現の起因となるような、いわば一連のつづき話のように展開されていくところにあります。その際、二人の関係は共同制作者ということがありますが、制作を個別に分担して二人が持ち寄るというような分担制作者の関係ではなく、自者と他者といった一对の対話者として、二人で話をつむぐような方法で表現物を仕立てていくという一体化した関係にあります。

今回は当ギャラリーをいくつに分けて小さな部屋をつくり、各室内をテレビで映写して、ものの像の虚実やうらおもて、物語が展開していく際の修辞上の順接や逆接を、色と形で直かに体験させるような仕事です。少し不思議な眼と身体の体験を心いくまでお楽しみ下さい。

1990年3月

京都市

## 京都市四条ギャラリー

京都市下京区四条通高畠東入(四条東洋ビル地階)  
TEL(075)223-1851 FAX 600



●開演時間：午前10時～午後7時

●休業日：水曜日、年末・年始

次回予告

京都市四条ギャラリー5

## hana'90

いま京都から新しい「いけばな」の波

- 第1期展 4月5日㈭～10日㈫
- 第2期展 4月12日㈯～17日㈰
- 第3期展 4月19日㈪～24日㈯
- 第4期展 4月26日㈬～30日㈰

**FLASH BACK II**

日常の有り様。  
美術という領域。  
切り離すか、接点を見出出すか。

作品が重要なのではなく、それが惹起するところの干渉作用が重要なのだ。

日常の繰り返し、その隙間で。  
しかし繰り返しは変わらない。  
私たちの作品は美術領域内において何程のこともない。

言い換えるなら、私たちの作品が美術領域内一内言語で語られるなら何の意味もない。

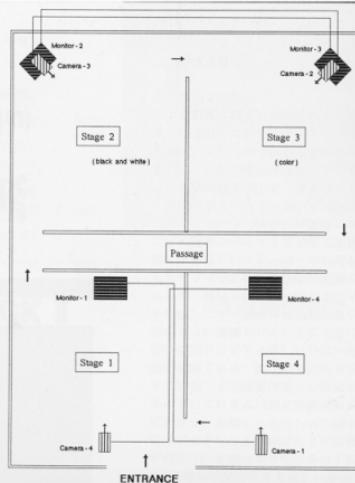
思考回路としての作品…思考過程の表出ではなく、その中に観客＋作者が紛れ込んでしまうような思考回路（回廊）そのものとしての作品＝空間。

迷路。ただし、抜け出すことが目的ではない。迷うこと、迷うこと楽しむこと。

- Stage 0 「思い出すこと、もっと思い出すこと」
- Stage 1 分離 「様々な記憶をあなたから分離すること」
- Stage 2 培養 「記憶を培養すること」
- Stage 3 増殖 「記憶が増殖する」
- Stage 4 再組織化 「様々な記憶からあなたを再組織化すること」

作品を見る（=鑑賞する）のではなく、作品に見られる（=干渉される）こと。

しかし、回路は単層ではない。  
注意深く歩む必要がある。  
だがまた、その回路によって運ばれて…。



## FLASHBACK

# FLASH BACK II

FLASHBACK/回帰する現在 に寄せて

(略) あの灰色の部屋は、浴室ではありません。それは、ビデオカメラによって、色彩の部屋から見られているからです。また、灰色の部屋も道に、色彩の部屋をモニターで見ることができます。この回路に秘密があるのかもしれません。見ながら、見られている。見るながら、見られて…。回路をたどるとすると、自分の視線が循環している。見える感覚におもいました。そして、気がつくのは、これが記憶の（あるいは夢の）視線のありかたではないのか、ということです。

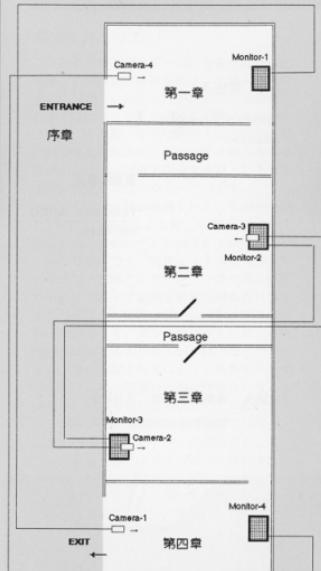
いつも私は、現実（と呼ばれる時空）から、あなたがたの時空（作品）に入っていくと、離されていく感覚がありました。あの空間は、その視線の通りかたにおいて、すぐれて現代的であるともかかわらず、です。あそこでは実体が、あいまいになる装置が組まれていると思います。情報（映像）が錯綜するからです。しかも情報というものの自

体には、中心点も実体も存在しないからです。では、そのままのなかで、私が不安におののいたか、というと、否です。

私は、一方の部屋で、もう一方の部屋から見られているはずで、しかし、その視線を感じつつも、けっして不快ではなかった。それは、回帰してきた自らの視線だという認識が、どこかにあります。安心できたらではないでしょうか。また、それから灰色の部屋において顕著だったのは、あそこが、記憶の源を刺激するからではないでしょうか。なつかしいのです。私の最古の記憶がモノクロの映像であるように。あの部屋に置かれたさまざまな物は、まるで私の記憶の断片であるのようです。断片は散在していくとおり隣接し、しかし全体性を回復できない。己の根幹的場へ収斂していく運動が、あそこにはあったように思うのです。

と同時に、すぐれて現代的だと思ったのは、あの空間には、私の（主体の）視線が循環することと関連するのでしょうか。が、無数のが存し始めたふうを感じられたことです。見ながら、見られているというシステムの中で、無数の私があり、その全てはおそらく虚体だったのではないかでしょうか。そして虚体にあることが、実は、現代の我々のよりようなのではないかと考えてしまうのです。

さいわいなことに、私はあの時空で、戻ること（遊ぶこと）ができます。私自身の勝手で思い込みかもしれません。が、その「戻つづける」ことが、いちばん、あの時空で虚体であるとのアリティ（と書くと逆説めでますけど）を得ることができる方法なのではなかったか。あるいは、あの時空に人間の存在の意義を付与することではなかったか、と（諒解していたらすみません）思っているのです。（略）



渡辺玄英 （手紙からの抜粋）

1990.1 Fukuoka